

氏 名 玉 腰 芳 夫
たま えし よし お
 学 位 の 種 類 工 学 博 士

学 位 記 番 号 論 工 博 第 1047 号

学 位 授 与 の 日 付 昭 和 53 年 3 月 23 日

学 位 授 与 の 要 件 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当

学 位 論 文 題 目 日 本 古 代 の 住 居
 —その建築的場所の研究—

論文調査委員 (主査) 教授 増田友也 教授 川上 貢 教授 西川幸治

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、平安時代後半期の寝殿造り住居を主要な対象として、そこでの通過儀礼・祭祀・其の他の諸行事の鋪設の諸様態の探究を通して、古代の住居の建築的場所の構造と意味とが考察されている。それらは生活世界の経験の中から建築的空間の場所としての本来の在り方を見なおすという今日的な要請に依っての論考である。すなわち、建物（住居）なる事物の設定する場所が空間を開くというその場所に、さしあたり注目するのである。

第1章では、ミンコフスキーのいわゆる生きられる空間としての場所の構造が粗描され、この論究の方向づけが行われている——フッサールは、諸場所の理念的（可能的）秩序として、「私はできる」なる運動感覚的意識のノエマとして空間を把握し、空間の様態に新知見を示すが、現象学的基盤を存在論的に確定しようとするハイデッガーは、さらに具体的にかかる能力を、現存在の近づけるというようにして事物の[・]もとに隠れ、そのことによって遠近としての[・]拡がり（空間性）を集めることに見、かかる[・]もとが場所だとする。拡がりを集めうるのは事物にもとづけられる場所が既に方域 *Gegend* を開き、方域に方向づけられているからであるという。

第2章では、主として『万葉集』に見える習俗・観想に基づいて具体的に探究される。住宅なる場所は、すなわち近づけるとして隠れる[・]もとは、建てるという場面にあっては、柱に於て家人の心が天と地なる方域に鎮まるとして現われる。それ故にそこには家人が平穩でありうる庇護的空間が開かれるのである。床には家人の分魂が留ると折口信夫はいうが、家人のいない床辺に斎瓮をすえて無事を乞い祈む歌にもそれは読みとれる。つまり住居なる場所が最も庇護的である床に於て中心的に顕在化している。そこは天地に方向づけられ、浮寝と対極の[・]拡がりがある。かように空間を開く場所はまた諸場所の秩序の設定であることが、大嘗宮の設宮の儀礼に着目することで示される。しかし場所は建設のみで設定されるのではない。隔てをなくすることとしての慣れ親しみが秩序を構成していくことが、移徙儀において儀礼的な食事や就寝で場所の可能性を確保するような仕方で遂行される。

このようにして人は建築的場所に内属するのであるが、第3章では生誕・結婚・死に際して行なわれる通過儀礼に着目することで、場所の構造と意味を明らかにする。この儀礼は分離・過渡・統合の三段階に分けられるが、分離と統合の間にあって無秩序な状態と見做しうる過渡期への着目が肝要である。まず生誕であるが、そこでは産穢を含めて生と死が強く関わっている。その場所としての産所についての様々な呪術宗教的配慮がそれを巡って展開される。すなわち出産それ自身の過渡的場所としての御産所と、誕生後の統合的場所としての白御帳とが見分けられるが、前者の座は他界的であり、そこに産婦の別身化するという観想が見うけられる。天・地への方向づけが生誕と共に始まるが、産養という多様な統合儀礼にあって白御帳は統合化の中心として、御産所とは別様に住居全体を分節し秩序づける。婚礼にあっては、あらためて住居を定めるのであるが、主として新夫が女家側に統合される形をとる。火合わせ・衾覆ひ・三日餅などがそうであって、闇の中での帳台が住居の場所構造を浮彫りにする。葬礼もまた生死が問題にされるのは当然であるが、死者と遺された親族とに特有の場所が設定される。死者については蘇生の可能性からも過渡期の意味が濃厚で、それが入棺・出棺に関わる儀礼に見うけるのみならず、格子・屏風・帳などで囲われた闇は、北首・薄座・衣更えなど他界の秩序をも示す。生者もまた倚廬（土殿）という先秩序的な室があり、闇に関わっている。したがって場所の闇は、他界であると共に生の秩序の基底である。

第4章は第1章の理論的導入を受けたもので、近づけることで遠近を集めるということが具体的な簾・几帳などにおけるもと・前・かげの現象を通じて論究される。この隔ては他者に対するものではあるが、住居の場合には、それが死に対して隔てられる場所であることが、清涼殿に於ける様々な年中行事を探究することで示されている。

論文審査の結果の要旨

フッサール以来、一般的空間論は、先験的から経験的に、静的から動的に、本質論から現象学にと移行してきたと言いうるであろう。今日の建築論もまた、それにつれて形式原理から象徴論に、表現論から意味論に、形而上学的美学から存在論にと移行しつつあるように見うけられる。本研究もまた、フッサールやハイデッガーの現象学的方法による、日本古代の住居に関する厳密な場所的究明であって、その根本資料とする古典的文献の解釈学的、民俗学的解釈を通して、諸場所を図式化し、それによって建築的場所の構造と意味分節を具体的に分析し、同時に普遍化しつつ、なお十分には解明しつくされていない建築の空間的現象に着実な地平を切りひらこうとするものである。その得られた成果の主要なものを要約すれば以下の通りである。

(1) 古代以来のいわゆる立柱式に象徴されるところの柱の建立とは、一つの鎮魂の儀礼であり、そのことからハイデッガーの住居についての指摘のように、その柱のもとに人の住まう天と地なる方域 *Ge-gend* が集摂されているということの論証。

(2) 斉き祀られる場所としての床は、住まう人にとって庇護的であるのみならず、大嘗宮の造営に見られるように、そのような諸場所の秩序において構造化されているということ。

(3) 人が住まうということは、このような意味において設定される建築的場所に内属することであり、

その内属の仕方が、諸場所の具体的構成の明暗、開閉などによって顕在化されていること。

(4) ファン・ヘネップの通過儀礼の分析にもとづく分離、過渡、統合の三段階のうち危機的な過渡期の場所が、建築的場所の本来的な在り方をもっとも顕著に示すものであること。

(5) 出産、結婚、死去などの過渡的儀礼においては、場所が一時的に無秩序化され、やがて統合的に回復されるということで、場所それ自身の動態を明らかにしている。

(6) このような先秩序的な場所が、ゲシュタルト心理学における地のように、生活的場所の基底をなしているということ。

(7) 邸内における舗設の隔てとは、距離現象と領域現象とはかならぬが、場所の現象は、それにも拘らず近接作用 *Entfernung* をもち、そのようにして建築的場所の両義的な在り方を解明している。

(8) 清涼殿における年中行事の場所的分析から、囲われるということによって生じる場所の意味が、単にその外方に相対的であるのみならず、図と地とのような仕方で逆転し、さらにはその地的統一において、根源的な場所性を開示するということ。

以上本論文は建築的場所、或は一般的に場所と呼ばれている方が、その固有の意味において分節され、構造化され、方向づけられていて、しかもその明暗、開閉において自他両界を交代させているということで、動的であり現出的であることを厳密に論証している。つまり場所において動くものが動くということではなしに、むしろ場所それ自身の現象もまた変転することを明確にし、空間的現象として建築を見ようとするとき、そうしてその知見にもとづいて建築を設計しようとするとき、これらの現象学的解明は、学術上実際上の根本的寄与となる。

よって、本論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認める。